

# 貧兒保育の話 (二)

二葉保育園 徳 永 恕 子

一口に鮫ヶ橋の貧民窟と申しますが鮫ヶ橋附近は近頃では餘程よくなつて參りまして、以前のやうに非道い貧民窟ではなくなつて居ります、これは新築の家屋が増えて來たために極端に困つてゐる貧民は何處か他の場所へ移轉しなければならぬやうになつて來たといふことも一つの原因であります。しかし確かに鮫ヶ橋の貧民が多少向上したためであるとも觀察されないことはないのであります。

鮫ヶ橋の日に／＼向上して行くに反して、今度分園を設けました新宿の南町邊は實に非道い貧民窟であります、この邊には日雇等の一定の職業に従事する者は極めて尠く、大抵は拾ひ屋と申しまして、ブリキのかけらなどを河の底や溝の中から

拾ひ集めて、これを屑屋の立場に持つて行つて幾許かに賣り、わづかにその日を送つて居るのであります、身體の利かないもの其他のものは家に止まつてゐて、一日かゝつて二錢位の麻糸つなぎをやつて居ります。この邊の人達の困ることは、拾ふと盗るとの區別が不明瞭であるといふ點であります。子供も斯ういふ周圍で育てられて居りますために、時々盗ることを拾ふこと位に心得るやうなことがあつて困るのであります。鮫ヶ橋の方も十年程以前には矢張この拾ふと盗るの區別がはつきりして居りませんでした。随分子供が盗みをして來ると、その敏捷さを賞めるなどといふ心得違ひの親もあつたのであります、その頃は鮫ヶ橋の本園の周圍の竹矢來の竹などは、竹馬を作るた

め、又焚付けにするために、よく破して持つて、行かれて了つたものでありました。

新宿分園の目下の周囲の状況は丁度十年程前の鯨ヶ橋の状況に似て居るところが澤山あります。この邊の子供は小さい子は風呂敷を持つて、大きい子——と申しても十三か四位の子は籠を擔いていづれも毎日焚付けを集めに出掛けるのであります。彼等の親達は子供の教育などといふことに就ては全然思を致して居りません、たい何うしたらより多くの仕事をさせて、自分達の足らず前を補せることが出来やうかといふことのみを、子供の上に就て考へて居るのであります。しかし子供達は自然の要求として非常に教育されることを欲して居るのであります。それ故に分園がいよゝゝ出来上りまして、開園式を行ひますと、彼等は喜んで登園して來るのであります。しかし年を取りすぎてゐるために生徒となり得なかつた子供達は年少の子供達が園へ通つて行くのが羨しく、自分

達だけが關ひつけられないやうに考へて、何となく寂しい氣がするものと見えて、私達の事業にいろゝと妨害を加へやうと致すやうになりました。十八才位のを頭にして是等の子供が執念く園に對して悪戯をいたすのであります、例へば園の周囲の四目垣は幾度彼等の手によつて破されたか知れませんが、潜り戸も幾度となく外づされました。中へ入つて來て、椽の下へもぐり込んだり、屋根へ上つたりします。彼等は蟲のやうに早く駆けまわります、實に手に了へないのであります。それから園へ來て折角多少教育的に導かれた子供をいろゝ悪魔的に誘惑して、私達の骨折を水泡に歸せしめやうと致します。

私はこれから銀三といふ少年が是等の園の外の小悪魔に幾度か囚にせられさうになりながらも、遂にその毒手を免れて、私達にまで來たことをお話致さうと思ひます。

銀三といふのは十歳の少年です。一昨年母が死

去しましたので、只今では父と七歳になる妹と三人で暮して居ります。父は車夫をして居ります、

綺麗な俵を貸りても齒代が拂ひ切れませんので、きたない俵を貸りて仕事に出ます、俵がきたないために仕事に出るのは夜であります。この父といふものはそれほど年齢でもありませんが、病氣のせいか、よぼ／＼して居りますので、一晚稼いでも、辛やく十銭位しか稼ぎ得るに過ぎないのであります。そこでこの親子三人は日に一度づゝ残飯を買つて来て食べて居ります、毎日女の子が蓋の無い桶を持つて、五銭玉を握つて残飯屋へ行くのであります。一日に一度しか食べないので、あとの二度は何も食べないでゐますが平氣なものであります。慣れて了つて居るのです。

昨年十一月、分園を開始する前に、私達は分園の周囲の貧民窟を歩いて、幼児の居る家へ立寄り、園へ通はせるやうにと話してまわりました。

銀三の家へは何うしたわけでしたか参りませんで

した。

さて開園の當日となりますと、澤山の幼児が集つて参りましたが、その中にこの銀三兄妹も混ざつて来たのであります。十一月の寒空に二人ともぼろ／＼の單衣物を着て、「あたしも入れておくれ」と言つてやつて来たのであります。私達は無論彼等を喜んで迎へてやりました。

銀三の家はお話したやうな次第でありますから却々規定の一銭づゝを持つて登園することが出来ません、銀三の父親はこのことを非常に濟まないと思つてゐるといふことが私達に分りました。私達は銀三の父親がまだ心から墮落し切つて居ないことを喜びました、そこで二人の子は特別扱ひとして何處までも教育してやることに致しました。

銀三兄妹は身體の抗抵力が強く、却々病氣などに襲はれるとはありません、時々不良少年の手足となつて悪いことも致しますが、多少の見込がありますので私達は彼を何うかして明るい方面へ向

けてやりたいと決心しました。それは彼等には兄妹の親しみ、親子の愛といふものが充分に表れて居たからであります。本来ならば銀三は十歳でありますから、私達の対象としてゐる子供達から見れば年をとりすぎてゐるのであります。しかし規則に縛られる必要のない私達は彼の入園を許したのであります。

入園してから毎日、兄妹は一錢づゝを持たずに通つて来て居りました。五六日経つてのことでありました、或日八錢持つて参りまして、「さアおあし」と言つて、私達の前へ出しました。私達はその時黙つて受取つて置きましたが、不審でしたので、夕方父親のところへ行きました。その時父親は酔つてでも居たものか、別にはつきりした挨拶もしませんでした、私達が園へ歸りつくと、やがて父親は血相を變へてやつて参りました、而してその金は自分に無断で子供等の持ち出したものであつて、それがなくては、明日俵をかりること

が出来ないから返してくれといふのであります。乃で私達はその八錢を返してやりました。銀三兄弟はこの時ひどく父親から叱られたのであります、この事があつて以來、銀三はぱつたり學校へ來なくなつて了ひました。私達が道で逢つて連れて來やうとしても來ません、逃げて行つて了ふのであります。後暗いところがあるので何となく氣まりがわるいのです。園へは來たいのであります、しかし何となく來にくいといふのが銀三の心持でした。それで銀三はさびしげな顔をして時々そつと園へのぞきに來るのであります。或時銀三に「お入りなさい」と言ふと、彼は入つて來ました。鉛筆と紙とを貸し與へましたらば、二時間ほど一心になつて繪を描いたり、假名で自分の姓を幾度も書いたりしました。これから又銀三は園へ來るやうになりました。

私達は銀三を何うしてもその悪い周圍から引離して置かなくてははいけないと思ひました。それで

私はなるべく彼を私の側に惹きつけて置くのがいゝと思ひました。それで私が新宿の分園から鮫ヶ橋の本園へ来る時には、常に銀三を伴うて来ることに致しました。本園の方にもよくお話しして置いて皆で銀三を愛しいたはつてやりました。銀三は始めて人の愛といふものを経験しましたが、外の誘惑がありますので、全然私達のものとはなつて居ませんでした。或る時園の井戸で銀三がポンプを押して水を汲んで居りますと外から仲間が二三人で銀三を呼びます、銀三は振り向きもしませんでした、到頭彼等の中へ入つて来て、銀三の手をひつぱつて外へつれ出さうとしました。銀三は「先生」と叫びながら、彼等の手から自分を無理に振りもぎつて、私達のところへ逃れて來ました。この時以來、銀三は外部の子供達と全然關係を斷つて了つたのであります。

銀三には年相當のことをさせて、園の仕事を手傳はせて居ります。晝の辨當をこの兄妹だけには

特別に與へることにして居ります。日曜にも園へやつて來ますので、只今では園の子供の如くになりました。親もしきりに感謝してゐると見えまして、女の子が「お父さんが幼稚園の先生はいゝ人だと言つた」などと申します。

銀三に向つて「あなたは後になりたいか」と聞きましたら、「何處へも行かれないやい」と申しました。よく譯を聞いて見ると自分が奉公にでも出たら、妹が一人でさびしいだらうから何うすることも出來ないといふ意味なのであります。涙の出るやうなやさしい兄の心ではありせんか。

銀三には二人の姉があるさうであります、一人は淺草邊で悪い商賣をして居り、一人は所澤の機屋へ行つて居るとかいひます。銀三の妹は、たけと言ひますが縹緞よしでありますから、姉達を襲うたと同じやうな運命が今にもこの子の上にも來さうな氣がして、私達は怖ろしく、一生懸命にそれを防いでやらうと思つて居ります。父親は近頃で

は貸りた俵をこわしたとかで、拾ひ屋になつて居ります。

銀三は夕方になると三四人の仲間と一緒に新宿停車場の近くへ炭を拾ひに行きます、彼等はこれを稼ぎにゆくと稱して居るのであります。彼等は一人で行くときと盗賊と間違へられるから皆と一緒に行くのだと申します、又夜おそく行つても盗賊と間違へられるので夕方行くのだと申します。

銀三は繪が好きで、新宿から鮫ヶ橋へ来る途中でも活動寫眞館の繪看板などを熱心に見るのであります。又額なぞをよく見覺えて居りまして、分園の額と本園のと同じのがあると直ぐ見分けるのであります。

銀三は只今鮫ヶ橋小學校へ通學致して居ります銀三は小學校を卒業して、奉公に行くと言ふことを樂しみに、毎日勉強して居ります。

新宿分園の卒業生は今年廿三人ありましたが、矢張南町の私塾で、一錢學校といふのがあります

から、そこへ皆入學するやうに勧めました、而して私達は常に彼等が學校へ行つてゐるか何うかを注意して、彼等が素直に延びてゆくやうに守つてゐてやります。(文責在記者)

### 寢覺め

窓の敷居をびよんと跳ぶ、

黄色い嘴の、光る眼の、

小鳥が、上眼で、言ふことにや、

「眠がり坊ちゃん、おかしいな」